

語註・典故・作詩メモ

顥氣（こうき）：秋気
 播州：旧国名：播磨の国を指す、現在の兵庫県南西部
 摂津：現在の大阪府北西部から兵庫県南東部

結句	転句	承句	起句	詩題
縷 ●	往 ●	名 ○	顥 ●	播州遊
縷 ●	時 ○	城 ○	気 ●	
想 ●	栄 ○	洋 ○	相 ○	
馳 ○	耀 ●	館 ●	携 ○	
郷 ○	憶 ○	旅 ●	訪 ●	尤韻
里 ●	今 ○	情 ○	播 ●	
秋 ◎	昔 ●	遊 ◎	州 ◎	

神漢連 九詩期会 詩箋 〔七言絶句〕

文 し 下 み 読

縷々想いを馳せる郷里の秋	往時の栄耀今昔を憶ゆ	名城洋館旅情に遊ぶ	顥気相携えて播州を訪れる	播州に遊ぶ
--------------	------------	-----------	--------------	-------

作詩日

H 28 · 10 · 24

仄起式

名前

武田 一郎

その他のメモ

九月に兵庫に夫婦で姫路城や神戸（摂津）の街に遊びに行った時の感慨を著してみた。

結		転		承		起	
片	△	常	○△	延	○△	沖	△
時	○	日	●	眺	●	繩	○
一	△	塵	△○	莫	●☆	孤	△
息	●	中	○○	遮	○	島	●
洗	●	嘆	△○○●	澄	○☆	往	●
心	○	不	●○	碧	●	同	○
朝	◎	遇	●●	潮	◎	僚	◎
片時の一息洗心の朝	へんじ いっさく せしん あさ	常日塵中にて不遇を嘆くも	じょうつとんちゆう ふぐう なげ	延眺遮るものなく澄碧の潮	えんちようさま ちようへま うしか	沖繩の孤島同僚と往く	おきなわ こうどう どうりなつ ゆ
題 沖繩宮古島行							
沖繩宮古島行							

平起式

【華州】

韻

名前南上清一郎

読み下し文

神漢連 九詩期会 詩箋 【七言絶句】

語註・典故・作詩メモ

「佐倉」と言えば、かの長嶋監督の出身地（佐倉市白井町）古くは平将門の血統（千葉氏）が莊園主を誇ったが、豊臣の小田原攻めで衰亡、徳川氏が江戸に入府すると佐倉の地は東の要衝として機能し、幕末には堀田氏が代々の城主となり藩校の成徳書院拡充、順天堂の開校等、蘭学を大いに奨励し「西の長崎、東の佐倉」と称されるようになった。

隍：：からぼり

結句	転句	承句	起句	詩題
昔 ●	不 ●	城 ○	急 ●	訪江戸徳川東要衝 (陽韻)
年 ○	覚 ●	廓 ●	陵 ○	
此 ●	到 ●	道 ●	馬 ●	
地 ●	蘭 ○	傍 ○	背 ●	
大 ●	医 ○	辿 ○	佐 ●	
繁 ○	屋 ●	旧 ●	倉 ○	
昌 ◎	敷 ●	隍 ◎	郷 ◎	

その他のメモ

作詩日 平成二十八年十一月九日

名前 原田 睦夫

江戸徳川 東の要衝を訪ねる

急陵の馬背 佐倉の郷

城郭道傍の旧隍を辿る

いつのまにか蘭医の屋敷に到り

昔年の此の地は大いに繁昌（なるを知る）

語註・典故・作詩メモ				結句	転句	承句	起句	詩題
				閑 ○	返 ●	晩 ●	落 ●	題 晩 艶 落 楓 (尤韻)
				行 ○	照 ●	艶 ●	楓 ○	
				探 △	風 ○	清 ○	寥 ●	
				勝 ●	光 ○	幽 ○	寥 ●	
				一 ●	紅 ○	錦 ●	蘸 ●	
				山 ○	染 ●	繡 ●	溪 ○	
				秋 ◎	樹 ●	稠 ◎	流 ◎	

神漢連 九詩期会 詩箋 [七言絶句]

その他のメモ

読み下し文			
閑行して探勝す一山の秋 かんこう して たんしょう す いちさんのかきゅう	返照風光紅樹を染む へんしょう ふうこう こうき じゆを そめ	晩艶清幽錦繡稠し ばんえん せいゆう きんしゆうしゆ	落楓寥寥として溪流に蘸 らくふう りょうりょう として けいりゅう に ひびき
晩艶落楓に題す ばんえん らくふう に だいす			

作詩日	平仄式	名前
十二月七日		
古川 彌		

語註・典故・作詩メモ

十月に四国、愛媛に帰郷した時の感想です。

結句	転句	承句	起句	詩題
秋 ○	祭 ●	黄 ○	天 ○	帰郷
景 ●	場 ○	金 ○	廣 ●	
家 ○	鼓 ●	田 ○	氣 ●	
郷 ○	韻 ●	野 ●	甘 ○	
詩 ○	西 ○	夕 ●	山 ○	(冬韻)
趣 ●	風 ○	陽 ○	上 ●	
濃 ◎	動 ●	松 ◎	峰 ◎	

神漢連 九詩期会 詩箋 〔七言絶句〕

作詩日

十一月四日

仄起式

名前

三並 哲治

秋景の家郷は詩趣濃やか	祭場の鼓韻に西風動く	黄金の田野に夕陽の松	天は広く気は甘く山上に峰	帰郷
-------------	------------	------------	--------------	----

--

語註・典故・作詩メモ

鎌台・古梵宮・古寺
 鎌倉
 千里の旅・小流に落ちた葉が長い旅に出た

結句	転句	承句	起句	詩題
青 ○	落 ●	散 ●	鎌 ○	秋 (東韻)
空 ○	葉 ●	歩 ●	台 ○	
似 ●	悠 ○	尋 ○	処 ●	
画 ●	々 ○	秋 ○	々 ●	
白 ●	千 ○	古 ●	半 ●	
雲 ○	里 ●	梵 ●	紅 ○	
通 ◎	旅 ●	宮 ◎	楓 ◎	

神漢連 九詩期会 詩箋 〔七言絶句〕

その他のメモ

画に似たり
 青空に
 白雲通ず

読み下し文

れん	鎌台	処々	半紅楓	ふう
きゆう	散歩して古梵宮に	秋を尋ねる		
	落葉	悠々	千里の旅	
	画に似たり	青空に	白雲通ず	

作詩日 平成二八年十一月六日

名前 森谷正彦

語註・典故・作詩メモ

どの社を参拝しても心の安らぎを得るとい
う大変おらかな気持ちになれた。

百二十五社の数を読み込めなかったのが残念。
日本の神社固有名詞について良い表現ができない。

禮 ●	乾 ○	東 ○	五 ●	謹題伊勢皇大神宮廟 真
拝 ●	坤 ○	西 ○	十 ●	
心 ○	創 ●	百 ●	鈴 ○	
靈 ○	造 ●	廿 ●	頭 ○	
自 ●	人 ○	得 ●	御 ●	
有 ●	安 ○	分 ○	塩 ●	
神 ○	在 ●	身 ○	濱 ○	

神漢連 九詩期会 詩箋 【七言絶句】

仄起式

作詩日 平成二十八年十一月

名前

諸星暢義

その他のメモ

礼拝心霊自ずから神有り

乾坤創造人安くに在り

東西百廿分身を得

五十鈴の頭の御塩の濱

謹みて伊勢皇大神宮に題す

神漢連 九詩期会 詩箋 【七言絶句】

結句	転句	承句	起句	詩題
風 ○	異 ●	碑 ○	連 ○	光明寺内藤家墓所 (元韻)
吹 ○	趣 ●	石 ●	連 ○	
野 ●	疑 ○	苔 ○	寶 ●	
菊 ●	茲 ○	生 ○	塔 ●	
寂 ●	他 ○	穢 ●	表 ●	
荒 ○	國 ●	草 ●	権 ○	
園 ◎	墓 ●	繁 ◎	門 ◎	

鎌倉の光明寺に江戸時代の大名内藤家の墓地がある。大きな宝篋印塔が連なつて壯観。ポロブドゥールのような東南アジア辺の遺跡かと驚く。(規模はずつと小さいが)あまり手入れされていなくて、草が生い繁り、六地蔵は草に埋もれていた。(寺の直接管理ではない?)
 ・穢草: 雑草 ・異趣: 普通ではないおもむき
 ・他国: 漢語? 他郷は○◎なので:
 ※起句書き下し「権門を表するも」と逆接で読みたい。

読み下し文

光明寺内藤家墓所
 連々たる宝塔権門を表するも
 碑石苔生じ穢草繁る
 異趣疑うらくは茲他国の墓かと
 風野菊を吹きて荒園寂たり

平仄式 平起式
 名前 山口 幸雄
 作詩日 平成28年11月8日

その他のメモ
 僧堂小徑繞籬垣 僧堂の小徑籬垣(りえん)を繞る
 寶塔苔生百草繁 宝塔苔生じ百草繁る
 往昔名家誇勢處 往昔の名家勢(せい)を誇りし処
 早秋夕照寂荒園 早秋夕照(せきしよう)荒園寂たり
 ・籬垣: いけがき。実際にはコンクリートの塀
 最初は右の形。昔の名家の墓地が荒れていることが主題。
 さらに通常の墓地とは違う、異様な感じであることも
 言いたくて、「疑是地上霜」にならつて改めた。散漫?